

I 幽霊ビル

最初はそんなこと、誰も信じていなかった。少しも信じていなかった。噂はいつだってそういうものだ。

あれは新学期が始まったばかりのころだったろうか。いちばんはじめに言い出したのが誰だったのか、今となってはわからない。噂はいつだってそういうものだ。

それでもみんな、自分が聞いたことはちゃんと覚えている。どこの誰から聞かされたのかも覚えていた。それなのに、たどっていつても出発点がわからない。噂はいつだってそういうものだ。

「小舟町のさ、三橋神社の隣にビルが建ってるだろ？ あすこに幽霊が出るんだってさ」

三谷巨の場合、そんなふうに教えてくれたのは、居酒屋「小村」のカッチャンだった。克美という名前は、彼が生まれるずっと前から決められていたもので、両親は女の子を期待していたし、超音波検査でも、小村さんのおなかで育っているのは女の子だと、産婦人科の先生は言っていた。ところが十一年前の四月九日、予定日より一週間も早く生まれてきたのは元氣な男の子で、その大きな泣き声には、産院の誰もが廊下の反対側からでもすぐに聞き分けられるようになってしまったくらいの特徴があった。ちよつぴりしやがれ声だったのだ。

「父ちゃんがさ、オレって母ちゃんの腹のなかでタバコ吸ってたんじゃねえかって言うんだ」
 ついでに言えば、小村克美君は顔色も浅黒い。これも赤ん坊のころからだそうで、ひよつとするとお母さんのおなかのなかで、タバコ吸いながら潮干狩りなんかしてたのかもしれない。コイツならそれくらいのことであっても不思議はないと巨は思う。なにしろ、お揃いの黄色い帽子をかぶって城東第一小学校へあがったその年の十二月、教室があんまり寒いからといって、火力の落ちた古い石油ストーブにびつたりとへばりつき、先生が教室に入ってきてからもそのままへばりついていて、席に着きなさいと叱られると、

「オレにはかまわないでいいからチャッチャツとやってください、チャッチャツと」
 と、愛想良く言い放ってしまったというコドモである。巨はその現場を目のあたりに見て、あまりにおかしかったので家に帰って話したのだが、聞いた方はてっきり作り話だと思ってしまったのも無理はない。このエピソードは伝説化しつつあり、巨たちが五年生になった現在でも、「冗談混じりに、」

「小村、宿題はチャッチャツとやってるか？」なんて言う先生がいるほどだ。
 巨に噂話を教えてくれたときのカッチャンの声も、いつもながらにしゃがれていた。ちよつぴり興奮しているのか、「ユーレイ」と発音するときはそこが裏返った。

「カッチャンはユーレイ話好きだからなあ」
 「オレだけじゃないって、みんな言ってるって。夜中にあそこを通りかかって、バッチリ目撃しちゃったヤツもいてさ、あわてて逃げ出したら追いかけられたんだって」

「どんな幽霊なのさ」
 「ナンカじいさんらし〜」

老人の幽霊というのは珍しくないか？

「どんな格好してんの」

カッチャンはごしごしと鼻の下をこすると、しゃがれ声を低くした。

「マント着てるんだって。真つ黒なマント。すっぽりと、こう」

と、頭から何かかぶる仕草をした。

「それじゃ顔見えないじゃんか。なんでじいさんだつてわかるんだよ」

カッチャンは顔をくしやくしやくにした。スパーや駅で、たまにカッチャンが小村の小父さんと連れだっているのに行き合うと、小父さんもちょうどこれと同じような顔をして、「よ、元氣か？」と声をかけてくれる。

「わかるもんはわかるんだよ。そういうもんだろ、ユーレイは」

カッチャンは言つて、ニツと笑つた。

「おまえつてへんなとこマジメでカチカチね。やつは鉄骨屋の息子」

亘の父の三谷明は製鉄会社に勤めている。製造業のなかでも製鉄や造船は、基幹産業としての役割が縮小してくるにつれて、本業以外のいろいろな分野に手を広げて会社の活性化を図らずにはいられなくなつて、だから今年三十八歳になる明も、製鉄の現場には、新入社員のころのごく短期間しかいたことがない。以来ずっと企画研究や広報の担当部署を回つていて、現在はリゾート開発専門の子会社に向向している。それなのにカッチャンは、製鉄会社というだけで「鉄骨屋」と呼ぶのだ。幼稚園のときからの付き合いなのだから、いい加減で覚えてもらいたいものである。

それでも確かに亘には、頭の固いところがある——らしい。理詰めでないと納得しないところも

ある——らしい。本人はほとんど自覚していないが、そう指摘されることは少なくない。そしてこの性質は、明らかに父親譲りのものであるらしい。最初にそのことをズバリと口に出したのは房総にいる父方の祖母で、今から三年ほど前のことだった。夏休みに帰省して、海でさんざん泳いだ後、身体が冷えているからかき氷なんか食べてはいけないと小言を言われて、口答えしたのがきっかけで喧嘩になった。そのとき、

「まあまあ、この子も明とそっくりだ。口が減らないね。これじゃ邦子さんもえらい苦労だよ」

千葉のお祖母ちゃんはそう言つたのである。

このとき、亘の母親でありお祖母ちゃんにとっては「嫁のクニコ」である三谷邦子は、全然聞かえないフリをしていた。

「お母さんが千葉のお祖母ちゃんに、あんな同情的なことを言つてもらうのつて、結婚十年にして二回目ぐらいいかなあ」

母は後でそんなことを言つていた。なんでお祖母ちゃんと喧嘩したのと尋ねるので、

「海水浴の後でかき氷を食べちゃいけないっていうのなら、じゃあなんでお祖母ちゃんとかき氷売ってるんだつて訊いたんだ」

答えると、母は声をたてて笑つた。三谷明の実家は房総半島の大浜という海水浴場で飲食店を経営しており、海の家経営権も持っているのだ。いちばん忙しい時期には、お祖母ちゃん自身がかき氷をつくつたりしているのである。

「あなたの言うことはもつともよ」

亘の頭をするするつと撫でて、邦子は言った。「だけどあなたが理屈っぽいっていうのも確かね。4

お父さんの頭を継いだのね」

当の明は、後日この話を聞かされて、そういうのは子供の減らず口というのであって、理屈を重んじて筋の通らないことを嫌うのとはまったく違うと、いささか不機嫌な顔をしたそうである。その機嫌の損ね方もまた理詰めだと、まあ言えなくもない。

とにかく、そういう性分の亘しゅうげんに言わせると、そのユレイとやらの噂話には、ヘンテコなところがたくさんあった。

そもそも、問題の三橋神社隣のビルというのは、正確には建築中のビルで、まだ落成してはいない。亘の通学路のちょうど中間あたりにあるので、毎日往復そこを通りかかる。だからよく知っている。噂では、その点がまず不正確だ。

実を言えばこのビル、ずっと建築中のままなのだ。工事が始まったのは、亘が二年生から三年生になる春休みのことだったから、もう二年以上も前のことである。地上八階建ての鉄骨が組み上がり、全体が青いビニールシートで覆われるところまでは順調に進んだようなのだが、そこから先はびたりと作業が止まってしまった。亘が気がついた限りでは、作業員が姿を消し、作業用の重機も出入りしなくなってしまうらしくして、青いシートが掛け替えられた。その際に、そこに印刷されている工務店の名前も変わった。

ところが邦子の話では、そのあともう一度、シートが変わったという。そのときもやはり工務店の名前が変わった。だがそれ以来は何の変化もなく、中途のビルはビルになり損ねた青いほおかむりのまま、周囲の家々を見おろして寒そうに立っている。正面に掲げられていた「建築計画のお知らせ」看板も、あるときから見えなくなっただけだ。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。